

# 木全ミツの グローバル随想

第2回

## 海外職業訓練協会 (OVTA)の誕生



イラスト・題字：長峯亜里

### 政府開発援助の経験を活かして

1970年初頭、東南アジアを中心に日本企業の進出ラッシュ、さらには70年後半にかけては東南アジアに限らず怒涛のごとく増大していく日本からの輸出に対する対日批判が巻き起こり、その勢いは抗しがたいものとなっていった。

産業界において考え出した1つの対案は、「そうだ、日本の企業がアジア諸国に工場を建設。そこで生産をして輸出すればMade in Japan製品にはならない」というものであった。だが各国の反応は「どうぞ、工場をおつくりください。ただし工場を建設する前に、わが国の若者たちを日本の企業で受け入れ育成していただきたい」と条件が付いていた。

当時、技能五輪国際大会で毎年優秀な成績を収めていた日本だったが、外国の若者たちを集団で受け入れて訓練をするといった経験はどの企業でも乏しかった。

この分野でノウハウがあるのは労働省（当時）の職業訓練局であり、10年以上の実績がある「技能人材育成分野における開発途上国協力」事業ではないか、ということから産業界を代表して4社の方々が相談に来省された。以来、仕事が終わった後の時間を活用し毎晩のように、ある時は夜を徹して情勢分析、意見交換、勉強会を重ねていった。その結果、日本の将来を考えた時、これは避

けて通れない重要な課題であり、政府と民間が協力して対応していこうという結論になり、財団法人海外職業訓練協会(Overseas Vocational Training Association: OVTA)の設立、OVTAセンターの建設、そして5億円の募金活動を行うことになった。

### 研修生の生活環境を第一に

OVTAセンターの建設に当たり私が最も大切にすることは、研修生たちの生活環境だった。開発途上国の研修生の受け入れについては、日本サイドの経験不足もあり国内でも様々な問題が生じていた。都内のある研修施設では、研修生が2階の部屋の窓わくに腰を掛けコーランを手に仲間や職員に向かって「皆も一緒にコーランを読んでお祈りを、さもなければ私はこの窓から身を投げて自殺する」と大きな声で叫び、皆が釘づけにされてしまったという事件があった。

私は数十人の研修生一人ひとりと面談し、OVTAセンターについての要望を聞いた。その結果、気分転換ができるサッカー場、お祈りができる静かなスペース、自炊ができるキッチンコーナー（「Pork OK」と「Pork NO」を別の階に設置）の3つに重点を置き取り組むことにした。

だがサッカー場は、当時サッカーに対する関心も低く大蔵省はもとより労働省の中でも否定されてしまった。お祈りスペースでは、「木全は、礼拝堂を造ろうとしている」という勝手な噂が先に